OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞冬月律著『過疎地神社の研究 : 人口減少社会と神社神道』
Author(s)	小林, 奈央子
Citation	宗教と社会貢献. 2020, 10(2), p. 71-77
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/77221
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書評

冬月律
『過疎地神社の研究―人口減少社会と神社神道』
北海道大学出版会、2019 年 9 月、A5 判、368 頁、7500 円＋税

小林奈央子*

1. 本書のねらい

本書は、「地域（共同体）に深く根をおろしてきた神社の変化過程に、過疎化がどのように関係しているのか」について、著者による実態調査（量的・質的調査）と集落の個別調査事例から明らかにすることを試みたものである（1 頁）。宗教社会学的アプローチに立脚しながら、過疎が地域と神社に与えた影響、および、過疎地域の氏子を含む地域住民と祭祀との関わりについて究明していくことをねらいとしている（3 頁）。「無根拠に神社は維持され得るという感覚的な議論を排し、過疎と神社の問題を直視した実証的な研究を行うことは、日本宗教文化の維持可能性を探求する上での喫緊の課題なのである」（36 頁）という著者の言葉からは、過疎問題に正面から向き合い、実態調査を行うことの必要性と自らそれを実践しようとする強い思いが感じられる。

2. 本書の構成と各章の概要

本書の構成は、第一部の「研究史編」、第二部、第三部の「実態調査編」と大きく 3 つの部分から成っており、構成は以下の通りである。

序　本書の狙いと構成
第一部　研究史編
第一章　神道と過疎化に関する研究史
第二章　過疎地域と神社をめぐる実態調査史
第二部　実態調査編 I （量的調査を中心に）
第三章　過疎地神社の実態調査
第四章　過疎地神社の現況
第五章　過疎地神社と氏子

* 愛知学院大学文学部・准教授・kobanao3@dpc.agu.ac.jp

第三部　実態調査編Ⅱ（質的調査を中心に）
第六章　過疎地の暮らしと氏神信仰の関係
終章　過疎と神社の関係

第一部「研究史編」の第一章では、「神道と過疎化に関する研究史」を整理している。本章では「過疎化を広義の社会変動の一部分として捉え、神社神道との関わり」をみていくために（18 頁）、先行研究を第Ⅰ期（昭和 20 年代－40 年代後半）と第Ⅱ期（昭和 50 年代－現在）とに分けて分析している。第Ⅰ期の研究では、石井研士による『戦後の社会変動と神社神道』（大明堂、1998）での指摘を踏まえながら、著者による分析を付け加える形となっており、この時期の研究は、近代化による神社神道の変化について扱うものが見られるものの、具体的な調査を伴わず、実証性が欠落していたとする（25 頁）。また、第Ⅱ期の研究では、神社の祭祀文化に及ぼした影響を明らかにしようとするさまざまな分野の研究が登場し、客観的・実証的な研究もみられるようになるものの、「個別的であり、相互に関連付けられない研究」（32 頁）であるとする。

第一部第二章「過疎地域と神社をめぐる実態調査史」では、昭和 30 年代以降発生した過疎問題に関連して、神社本庁や神社庁によって行われたいくつかの組織的な実態調査の内容を検証し、それらの調査が抱える課題を提示している。著者は特に、神社本庁が典型的な過疎地域に選定し、著者自らも実態調査を行っている高知県に限定して分析し、その結果、2 つの問題があったことを指摘している。1 つは、神社本庁が、昭和 47 年～51 年までの 5 か年に亘り過疎化の影響が危惧される地域を調査し、追跡調査の必要性があると言及しているにもかかわらず、現在に至るまで行われていない点、もう 1 つは、調査の設問に変化がない、および、調査対象が神職のみで氏子地区の住民の声が反映されていないなど、調査の方法そのものに関する問題点である（64-65 頁）。

第二部では、第一部で明らかになった問題点を踏まえ、著者自身が過疎地域の神社と氏子を対象に実施した実態調査をもとに議論が進められる。

第二部第三章「過疎地神社の実態調査」では、昭和 47 年に神社本庁が行った実態調査のうち、高知県高岡郡を対象に行われた調査と、その後の追跡調査として、著者が平成 23 年に同地域で行った調査結果を比較している。それにより、社会構造の変動によって過疎神社がどのような変化を余儀な

くされ、また、そうした過程に対してどのような対応をしてきたかを明らかにしようとしている（78 頁）。追跡調査地は、昭和 47 年の神社本庁による「過疎地帯神社実態調査」で取り上げられた、高知県高岡郡の旧窪川町（現四万十町）、旧大野見村（現中土佐町）、旧葉山村（現津野町）の 1 町 2 村で、平成 23 年 6 月～10 月にかけて計 5 回の調査（神職と一部の氏子を対象とした面接調査）を実施したという（80 頁）。この 1 町 2 村は、神社本庁による、昭和 52 年の『過疎地帯神社実態調査報告』でも宮司不在神社数が多い（旧窪川町）、あるいは、氏子減少により維持不可能神社が多い（旧大野見村、旧葉山村）として調査対象となった地域でもあるという（81 頁）。ここで比較項目の 1 つ 1 つを挙げる紙幅はないが、著者は、両者の比較の結果、過去の調査時と比べて「外形的変化は少ないことが確認できた」（97 頁）とする。しかしその一方で、氏子が氏神と総鎮守の二重（もしくはそれ以上の）氏子となり、一戸当たりの負担金が多額になったり、祭り運営の困難、伝統行事や当番制の衰退、神社合併（合祀）の難しさなどの問題が出てきていると指摘する。

第二部第四章「過疎地神社の現況」では、著者が平成 24 年に旧窪川町（現四万十町）の神職に対して行ったアンケート結果から、過疎地神社の護持運営の実態と特徴を明らかにしている。調査は、同町に鎮座する宗教法人格を持つ 103 社を対象に、それらの神社に奉職する 6 名の神職（専業、全員が本務社以外に兼務社をもつ）に対して行われた。まず、調査シート（全 26 問、基本情報 12 問、神社の護持運営に関する質問 14 問）を配布し、記入を依頼する（郵送調査法）。その後、回収した調査シートに基づいてまとめた内容について、再度回答者を訪れて、聞き取り調査を行ったという（102 頁）。著者によれば、旧窪川町で神社の護持運営に直接かかわっている氏子（祭礼氏子）は、昭和 50 年頃と平成 24 年では 2 割ほど減少しており（4900 世帯から 4100 世帯）（110 頁）、氏子費の減少から、祭典が簡素化したり、社殿の修繕にかかる費用も賄うことが困難な神社もあるという（116 頁）。

こうした状況を知ると、さぞや後継者問題や護持運営について悲痛な声が上がっているのだろうと予測するが、氏子総代や責任役員の後継者について「心配あり」と答えた神社は約 2 割であったり、氏子数 5 戸でも「心配ない」と回答した神社があるなど、「単に氏子数が少ないだけで護持運営の可否を判断することはできない」（118 頁）という。また、「総代・後継者

の高齢化が案じられていますが、その見通しはいかがでしょうか」（問 7）という質問に対し、「心配ない」と答えた神社が 8 割以上であったという。しかし、その一方で著者によれば、自由回答（記述）の中には「将来の護持運営に対する不安」、すなわち「心配あり」を示すような内容が含まれているとし、選択回答における「心配なし」と自由回答における「心配あり」というように両者で矛盾が見られるという（120 頁）。

また、第四章の後、附論 1「過疎地域の神社」がある。旧窪川町の宮司 3 名と権禰宜 1 名に座談会として自由に発言してもらった内容を掲載しており、神職たちの率直な意見が紹介されている。

第二部第五章「過疎地神社と氏子」では、著者が旧窪川町の氏子を対象に実施した「四万十町窪川地区の神社と氏子に関する調査」の結果から考察している。著者は旧窪川町に鎮座する 103 社の氏子のうち、20 歳以上の実質氏子（祭礼氏子）500 人に対し、神社の夏祭り、秋祭りのいずれかに集まるなかで調査票（全 38 問）の記入を依頼する集団調査法を採用したという。回収率は 86％で有効回答数が 430 票であったという（172 頁）。設問内容は、基本属性、日常的生活活動、非日常的活動（年中行事、神社行事）、神社に対する氏子意識などで多岐にわたる。

旧窪川町の氏子の年齢層は 60 代が最も多く、65 歳以上の高齢者が 6 割弱を占める。著者によれば、この調査の回答者の 6 割強が自らの集落を限界集落（65 歳以上の高齢者が集落人口の 50％を超え、集落の協働活動の機能が低下し、社会的共同生活の維持が困難な状態にある集落）と認識し「高齢化する集落状況を意識している」という（174 頁）。

こうした氏子の意識が背景としてある当調査地域は、神葬祭が 6 割弱（179 頁）で、神社への関与がもともと高い地域であるようである。それもあり「氏子は人生にかかわる通過儀礼（人生行事）や年中行事を、集落神社（氏神様）との関わりの中で行っていることが読み取れる」という（182 頁）。さらに、集落神社以外の神社を祀っている人も 6 割弱存在し、非法人の神社でも氏子による祭りが毎年行われている（184-185 頁）。そしてここから推察されることは、「集落消滅に伴う信仰生活の危機」（185 頁）であり、集落が消えることよって、集落神社およびそれ以外の神社の消滅であると著者は述べる。自由記述の問いについては、世話が困難になった時の神社合祀（合併）について不可能、もしくは反対といった意見が出たようである

（192 頁）。

第三部「実態調査編Ⅱ（質的調査を中心に）」第六章「過疎地の暮らしと氏神信仰の関係」では、第二部での内容を踏まえたうえで、旧窪川町の 7 つの地域のうち、立西・仁井田・松葉川・東又・街分の 5 つの集落の氏子を対象に行ったインタビュー調査をもとに考察を進めている。旧窪川町では、80 の集落のうち 28 集落は都市型社会であり、東又、街分がそれにあたるという（206 頁）。各集落のインフォーマントのライフヒストリーとそれぞれが氏神に対してどのような信仰や思いを持っているかが紹介されている。一部を挙げると、例祭日を（土日等に）変更しないことで地域の次世代に神祭を守ることの大切さを伝える（立西）、隣接集落との集落合併・お宮の合併の話が出ているが、お宮の合併だけは何としても避けたい（仁井田）、神社合併は集落の氏子を守ってくれている氏神様・仏様を捨てることにつながる（松葉川）、祭りの際の飲み食い（直会）が少なくなってきたことが祭りの活気を消したのではないか（東又）、若い人にもっとお宮に親しんでもらいたいが、氏子に対して何らかの意味を付与（教育）しない限り氏神信仰は継承できない（街分）などの声があったという。

また、第六章の後、附論 2「伝統芸能と氏神信仰」がある。旧窪川町桧生原における伝統芸能を通じた氏神信仰の継承について、氏子総代の男性の発言を取り上げ論じている。男性は、子どもと大人の関わりの中で伝統芸能を経験することがのちに氏神信仰の継承につながると述べる（288 頁）。

終章「過疎と神社の関係」では、実態調査の結果を踏まえ、過疎地神社の類型化を試みている。それにより「現在いかにして過疎地神社が護持運営されているのか、また、どのような神社が将来持続可能であるかを示すことが可能となろう」（297 頁）とし、「神社の氏子」、「神社の運営」、「神社の将来」という 3 つの項目に分けて検討している。

「神社の氏子」については、氏子にもさまざまな類型があり、神社本庁の規程による氏子区域の住民を指す氏子（地域人口）と実際に神社運営や祭礼にかかわる氏子（実質氏子・祭礼氏子）との間には大きな差があるとする。著者が調査した旧窪川町では、ほとんどの集落神社が実質氏子と祭礼氏子によって構成されているが、傍観氏子・無関係氏子とも言われる名目氏子が多い地域においては、神社の維持継承が困難になると神社合祀や法人の解散は避けられないという（300 頁）。「神社の運営」については、「神

職・氏子混合型」、「氏子主導型」、「神職・氏子・崇敬者混合型」、「神職主導型」の 4 つの類型を提示し、旧窪川町では、実質・祭礼氏子が多く氏子意識も高い、「神職・氏子混合型」と「氏子主導型」のパターンに集中しているという（302 頁）。「神社の将来」については、実質・祭礼氏子の割合と氏子費を収めている氏子の割合が高い、および「神社行事に積極的に参加し、神職と日常的な交流がある氏子が多い」という 2 つの基準を満たしていると、「護持運営に大きな心配がないと考えられ」「理想の神社の将来である」という。旧窪川町の場合は、祭礼時のみに神職との交流がある祭礼氏子を除いた実質氏子（氏子費を払い日常的に神職と交流のある）の割合が低く、後者の基準を満たしていないため「一部条件あり維持可能神社」（Ⅱタイプ）に分類されるという（302-304 頁）。

3. 本書へのコメント

最後に、本書に対するコメントを述べたい。著者は「神社が今後も維持可能であるという感覚（錯覚）が研究者においても一般化している」（34 頁）ことを指摘し、過疎化地域の神社について実証的で継続的な研究の必要性を繰り返し主張している。同様の問題を抱える寺院の研究に比べ、神社関係ではそうした研究が進んでいないことへの憂慮も伺える（35 頁）。本書がそうした神社界の現状に対し、一石を投じる 1 冊であることは間違いない。また、「時代の変化と地域のお宮の変容について…実際のことをありのままに伝える」（265 頁）という思いは、幾度も調査地域に足を運び、収集した関係者へのインタビューからも伝わった。そして、そのように得られた地元の人たちの語りには多くの示唆的な言葉があったように思う。旧窪川町桧生原における伝統芸能を継承する氏子男性の「ここに居住する人たちが主役でやってこそ意味がある」（279 頁）という指摘は重要であり、寺院の場合とは異なる、過疎地域と神社が抱える問題を表している。神社は地域を守る鎮守であるがゆえに、基盤である地域自体が消滅すれば神社も消滅せざるを得ない。また、別の氏子男性たちが述べるように「地域統合があるとしても、氏神に関する問題はそう簡単にはいかない」（226 頁）、すなわち、各地域に祀られた氏神の信仰を統合することは現代においても非常に困難を伴うことがわかった。

さらに、神社の場合、地域の現状や地域性などと切っても切り離せない問題であるため、著者が試みた 1 つの対象地域に絞ってインテンシブな調査を行うことは重要である。しかしそれと同時に、他地域ではどのような状況にあるのか、他地域で同時進行している事態を把握するためのより広域での調査も必要であり、それには多くの共同研究者が求められる。しかも、単独での研究／共同研究が相互に有機的なつながりを生むものであることも大切であろう。

そして他方では、現地の当事者自ら（神職と氏子）が過疎化地域の神社が抱える「問題を共有し、それを受けた氏子が今度は集落の住民と共有するといった流れを作る」、すなわち、諸問題の対策を話し合える「場づくり（土台）」（187 頁）も不可欠であることが本書を通じてよく理解できた。